

日蓮文書の研究（４）

—真蹟に現われる「かな」の全容

小 林 正 博

はじめに

筆者のもとに日蓮の真蹟断簡や御本尊の鑑定依頼が往々にしてある。その数は10件を優に超えたが、今まで日蓮の真筆に出会ったことはほとんどない。

一見して、書風といい筆致といい酷似しているようであっても、一字一字を分析していくと、他筆と断ぜざるをえないものばかりである。近世文書のように多くが「御家流」の文字で表記されるのと違い、中世の古文書、特にその中でも日蓮の真蹟は、独特の字形・字体を持ち、古文書の解読に精通している人であっても読めない文字が多く、難読文書の部類に入るだろう。

しかしそれだけに真筆か他筆かを判定する基準が示されれば、より確実な結論を引き出すことは可能である。本稿では、コンピューターのすぐれた検索機能を駆使しながら、主に古筆学の手法を用いて、真筆・他筆の峻別に寄与できる判定基準を明示していく。本稿で提示する「真蹟判定基準」は以下の作業をもとにして作成したものである。①立正安国会編の『日蓮聖人真蹟集成』所収の真蹟を変体仮名フォント（紀伊国屋版の「今昔文字鏡」と興風談所作成かな外字）、旧字体等を使用して解読し、これをPDFファイルとして検索可能のデータを作成、②次に「文字」検索をかけて、これに該当する写真の切り貼りを集積、列挙し、判定基準を確立する。①は使用する字体からの分析、②は字形からの分析をもとにした判定基準となる。

なお拙稿「日蓮文書の研究（２）」（『東洋哲学研究所紀要』20号 2004年）と一部

(2)

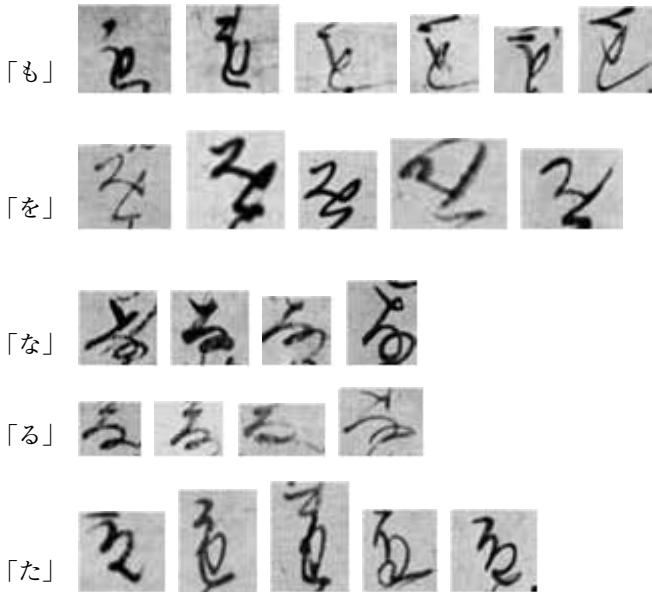
重複する箇所があるが、今回新たに加筆し真贋判定、真筆の解説等に資する内容として公表する。

1、字形からのアプローチ

表1 日蓮のかなの字形

かな 字源		日蓮仮名の字形	ね祢		まず縦一線
あ安		入り方が直角	は者		始筆がやや右下がり
い以		第一角が縦一線	はハ		縦の二線をつなげる一筆書き
え江		N型 斜め線が鮮明	ひ比		下の丸みがない
き幾		二本の横線が「乙」にみえる	ま末		二本の横線が「乙」にみえる
く久		二段にくびれる	も毛		縦長で中央の上下線が特徴
し志		始筆が ㇿ	や也		カタカナのセに近い
すす		終筆が右に流れる	ゆ由		始筆が縦に長くなる
そ曾		ろに見える下部やせ	る留		始筆が 一 「な」と対照的
た堂		独特な形	れ礼		終筆がL字
ち知		始筆がやや右上がり	ろ呂		現代字に酷似 下部に丸み
つ川		M型	わ和		始筆が短い縦線
な奈		始筆が ㇿ 「る」と対照的	を遠		横長で中央の水平線が特徴

まず真蹟仮名の中で留意すべき「かな」の字形の特徴を一覧にしてみた。日蓮の仮名の筆癖はほぼこの表によって抑えることができる。もちろん、くずしの度合いや、接続する文字による筆の流れの違いなどもあって、この筆癖が現れない場合もあるが、最大公約数的な字形の特徴の標準字形として提示した。この判定基準の中で特に威力を発揮するのは網掛けした「も」と「を」の相違「な」と「る」の見分け、「た」の特徴である。以下のように列挙してみると「も」と「を」、「な」と「る」は微妙な違いが見えてくる。「た」は日蓮独特の字形として有効な判定材料となる。



2、字体からのアプローチ

現代人はだれもが同じひらがなを書くことは、あたりまえになっているが¹⁾、中世ではそれこそ10人いれば10通りのひらがな表がつくれてしまう。つまりどの仮名字体を使用するかは、人によってまちまちだったのである。表2はそ

(4)

のことを如実に表わしている。たとえば日蓮の真筆を多く書写した弟子・日興でさえ、真蹟の使用仮名を無視して日興自身の使用仮名の習癖を優先させて写しているのである。しかし、これを活字化すると字体の相違は情報としてまったく残らなくなる。そういう意味で使用する仮名字体の把握を研究領域の一つに掲げる古筆学の研究方法は新たな成果につながる可能性を秘めている。

この表では法然・親鸞に加え平安期成立の『土佐日記』で使われる仮名字体も掲載しておく²⁾。

表2 使用がなの字体の相違

日蓮	日興	法然	親鸞	土佐日記	日蓮	日興	法然	親鸞	土佐日記
江	江	江	え	え	ゐに	にゐ	に	にゐ	にゐ
を	を	お	を	お	の乃	のれ	の	の	の
か	か	か	か	のゐ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
く	く	く	く	く	ひ	ひ	ひ	ひ	ひ
け	け	け	け		ほ	ほ	ほ	ほ	ほ
こ	こ	こ	こ	こ	ま	ま	ま	ま	ま
さ	さ	さ	さ	み	み	み	み	み	み
し	し	し	し	し	め	め	め	め	
す	す	す	す	そ	そ	そ	そ	そ	そ
セ	セ	セ	セ	セ	リ	リ	リ	リ	リ
ろ	ろ	ろ	ろ	そ	る	る	る	る	る
れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ
わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ
な	な	な	な	な	な	な	な	な	な
					を	を	を	を	を

出典 日蓮：『日蓮聖人真蹟集成』法蔵館 1976年 日興：『日興上人全集』興風談所 1996年 法然：『日本名跡叢刊 第57回配本 源空消息』二玄社 1981年 親鸞：『日本名跡叢刊 第26回配本 親鸞消息』二玄社 1979年 土佐日記：春日政治『岩波講座 日本文学』第20回配本「仮名発達史序説」74頁 1933年

法然と親鸞のかなは現存する文書が少ないため、他の字体を用いた可能性もあるが、日蓮—日興、法然—親鸞という師弟関係であることを越えて、それぞ

れに使用する変体仮名に独自性があることは動かせない。この４人だけを比較しても、かな文字の標準的使用などなかったことが判明する。この違いはそれぞれの若き日の習字経歴の違いと、現代のような普遍的、一般的なかな文字教育がなかったこともあって、使用の有り様が独特なものになったと考えられる。そして、その独特な使用は一種の習性として定着し、生涯を通して他からの影響をほとんど受けないものであった。それゆえにこの視点からの日蓮の使用仮名の分析は、真蹟研究の上できわめて有効な成果をもたらすことが期待される。

以上のような変体仮名の使用習性についての研究は先達があり、小松茂美博士が提唱した「古筆学」の手法と奇しくも一致するものである。博士は「字母³⁾」使用の頻度率の調査。これは、わたくしが初めて試みた筆跡鑑定の一方法。書というものは、書く人によってさまざまな個性をもつ。同じ手本を習っても、成長の過程においては次第に筆跡の個性、つまり癖をつくり出す。書の癖は著しく個人差のあるものである。」⁴⁾と述べている。小松の言う「字母使用の頻度率の調査」は、膨大な量が現存する日蓮真蹟に対して、先達たちが気の遠くなるような手作業で実施してきたのであるが、本稿ではコンピューターの正確無比な能力を活用して同じ作業を試みている。その結果、先達の業績の足りない点、不正確さを修正する成果を打ち出せたと考えている。

３、日蓮使用仮名の全容

ここでは日蓮の使用した「かな」の全容を示し、その特徴を作表によって見出ししていきたい。表は３－①から③まであり、それぞれ日蓮の使用仮名(表３－①)、例外的使用仮名(表３－②)、使用しない仮名(表３－③)となっている。

これらの表は『日蓮聖人真蹟集成』全９巻に現われるすべての日蓮の使用仮名を拾い出し、これを整理してまとめた成果である。したがってこれら３つの表は日蓮の使用仮名を押さえる標準表となる。つまり使用字体による真蹟判定基準の提示が実現したと考えている。

まず表３－①「日蓮の使用仮名」のそれぞれのひらがなの欄の左側は常用仮名、右側は使用頻度の低い非常用仮名となっている。ひらがな右の漢字は字源を示

(6)

す。

この表から常用が2つあるものが10組あることがわかる。「け・き」「こ・お」「し・志」「よ・に」「の・乃」「は・は」「ほ・ほ」「み・ミ」「を・t」「る・ふ」である。どちらを書くかは、言葉による使い分けが見られるものもある⁵⁾。

表3-① 日蓮の使用仮名

行	ア音	イ音	ウ音	エ音	オ音
ア	あ安	い以	う宇	江 江	を遠
カ	か加	き幾	久 久 具 具	け計 遣 遣	こ己 古 古
サ	さ左	し之 志 志	す寸 寿 寿	セ世	ろ曾
タ	を堂 多 多	ち知	り川	て天	と止
ナ	ろ奈 那 那	よ尔 仁 仁	ぬ奴	ね祢	の乃 乃 之 之
ハ	ハ八 者 者	ひ比	ふ不	へ部	ほ保 本 本
マ	ま末	み美 三 三	む武	め女 免 免	も毛 t 毛
ヤ	や也		ゆ由		よ与
ラ	ら良 羅 羅	り里	る留 累 累	れ礼	ろ呂
ワ	わ和	ゐ爲		ゑ恵	を遠
	ん无				

すでに先学によって類似の成果はいくつか示されているが、いずれも正確とはいえない。鈴木一成は『日蓮聖人遺文の文献学的研究』（山喜房仏書林 1965年 228—231頁）で日蓮の使用仮名を一覧化している。しかし、その中には日蓮が書かない「を（堂）」「つ」「参（は）」「そ」「り」「は（る）」などが記されている。これらは真蹟の紙面に確かに現われている仮名ではあるがいずれも他筆であり明らかに誤認している。特に「た」の項に「を（堂）」「多（多）」を掲げているが「た」は「を（堂）」とすべきである。「を（堂）」はまったく書かれない字体であり、「多（多）」は使用頻度が極端に低く真筆上にあっても他筆の場合が多い。また春日正三の「日蓮聖人遺文の国語学的研究—仮名の字母・字形を中心に」（『立正大

学大学院研究紀要』第4号所収 1988年)には、日蓮使用の仮名字源・字体の一覧を掲載している。しかし、これは消息6編に限って調べたため、冬(く)・ふ(た)・寝(ら)についての言及がない。また 残(を)を挙げているが、真筆では出現しない字体である。

さて表3-①により常用仮名は以下のように整理することができる。

【現代かなと同じ日蓮の常用仮名】

あいう	かきけこ	さしす	ちてと
にぬねの	ひふへほ	まみむめ	やゆよ
られろ	わを	ん	

これによって現代かなの「え・お・く・せ・そ・た・つ・な・は・も・り・る」と読めるひらがなが文書の上に書かれていれば、日蓮筆である可能性はきわめて低いという判定が下せることになる。ただこのうち「く」は上の字との連綿(続けて書くこと)により出現する場合は2箇所見られることと、「は」は後述するが真筆で5箇所のみ見られる例外的使用仮名であることを注記しておく。

それでは日蓮は現代かなの「え・お・く・せ・そ・た・つ・な・は・も・り・る」をどう書いたのか。一覧にすれば次のようになる。

現代かな え・お・く・せ・そ・た・つ・な・は ・も ・り・る

①日蓮のかな 江 を く セ う め り ゐ ハ え 屯 ㄥ る ふ

その他、先に挙げた常用が2つある10このひらがなのうちよく使用される変体仮名も挙げておく。()内のかなは読みを示す。

②ㄥ(け) お(こ) ㄥ(し) よ(に) 乃(の) か(ほ) ミ(み)

①と②の変体仮名の使用は真筆であることを後押しすることになる。

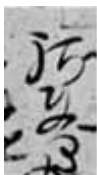
(8)

表 3 - ㉔ 例外的使用仮名

変体仮名	現代読み	使用回数	『日蓮聖人真蹟集成』の巻数と頁数
ㇶ	あ	1	2 - 291
伊	い	1	9 - 106
お	お	4	3 - 34 4 - 206 5 - 23 9 - 132
お	さ	1	4 - 243
つ	つ	1	4 - 279
に	に	2	3 - 35 9 - 62
の	の	3	1 - 132 4 - 240 4 - 241
は	は	5	1 - 150 2 - 63 2 - 98 4 - 86 5 - 3
お	ゐ	2	4 - 314 5 - 9

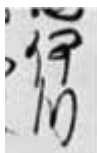
出現回数も少ないので煩を厭わず切り貼り写真をすべて掲示すると次のようになる。

ㇶ 2 - 291 智妙房御返事



ㇶ まゝ

伊 9 - 106 諫曉八幡抄



伊 ㇶ

お ① 3 - 34 富木入道殿御返事 おへせし ② 4 - 206 兄弟抄 おほ

③ 5 - 23 千日尼御返事 おさめ ④ 9 - 132 上野殿母尼御前御返事 おをゐ

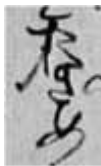
①



②



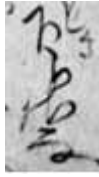
③



④



は ４－２４３ 下山御消息



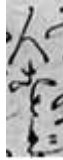
下らける

い ４－２７９ 妙法尼御前御返事



いけれども

ニ ３－３５ 富木入道殿御返事



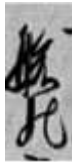
人おとニ

９－６２ 芋一駄御書



ひんかしニハ

れ １－１３２ 撰時抄



般若れ

４－２４０ 下山御消息



五百年れ

４－２４１ 下山御消息



今れ

は ① １－１５０ 撰時抄 はた又 ② ２－６３ 法門可被申様之事 者は

③ ２－９８ 転重軽受法門 候ハは（「ハ」は「わ」の疊書）

④ ４－８６ 法華題目抄 はの穴 ⑤ ５－３ 千日尼御返事 文字は



拵 4-314 孟蘭盆御書



四拵陀 5-9 千日尼御返事



拵提希

以上、日蓮の常用・非常用仮名（表3-①）、例外的使用仮名（表3-②）によって日蓮の書いた「かな」の全容を示すことができた。

ここであらためて真筆か他筆かを峻別する上で、より精度の高い判定基準を示しておく。

表3-③ 使用しない仮名・・・現代かな

え（字源 衣）	お（字源 於）	た（字源 太）	つ（字源 川）	り（字源 利）
---------	---------	---------	---------	---------

字源は同じだが現代仮名のような字体では現われない仮名

せ→セ	そ→ろ	な→ろ	も→も・t	る→る
-----	-----	-----	-------	-----

つまりこの10文字は、字形の上から言えば、日蓮が書かないひらがなということになる⁶⁾。

「えおたつりせそなもる」と見える文字に出会ったら、それは真筆ではなく他筆であると判定できる有効な「仮名基準」となるのである。

以上述べてきた、1、字形からのアプローチ、2、字体からのアプローチ、3、日蓮使用仮名の全容の3項目によって、真蹟か否かを判定する基準はほぼ示すことができたと考えている。これを標準尺度にして真蹟上に記される文字をさらに分析していけば、様々な成果を生み出すことが可能となる。

次の項ではその一端として真蹟上に多く現れる「他筆ルビ」について検討する。

4、仮名ルビはだれの筆かー他筆ルビについての考察

これまで示してきた字形・字体からの古筆学的アプローチを援用して、これまで詳細な研究が為されてこなかった日蓮の真蹟紙上に多く見られる他筆による「仮名ルビ」について一歩踏み込んで論じておきたい。

真蹟紙上に記されるかなルビを真筆と他筆に明確に区分したものとして『日蓮大聖人御真蹟対照録』がある。筆者もこの『対照録』の真筆他筆の峻別はすぐれた成果の一つだと敬服している。しかし、仮名ルビがだれのものかという疑問に答える研究成果は未だに出ていない。概して、仮名ルビは直弟子・日興によるものが多いと言われてきたが、はたしてそうなのか、またなんのために振られたのか、本稿で考察していく。

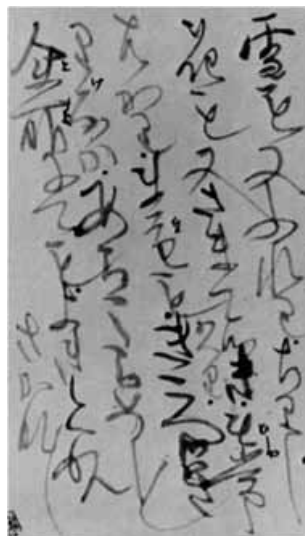
まず日蓮自筆によるルビももちろん見られ、これらは仏教用語や固有名詞あるいは難読語などの読み方を示すために振る場合と地の文字が読みづらい場合に振るものがある。しかし量的にはけっして多くはない。それは門下の教養に合わせて、漢文体、和漢混合体、仮名文字主体と書き分けているからである。たとえば南条時光宛ての消息を見ると漢字を書いてルビを振るのではなく、始めからひらがなを多用するので必然的にかなルビは少なくなっている⁷⁾。

一方、他筆者による仮名ルビは多く見られる。現代に生きる我々から見れば、真蹟紙上に加筆することは不遜に思えるし、そもそも私的な書状に第三者が書き込みをすることは普通ありえない話である。そこでまず真蹟に他筆者がなぜルビを振ったのかを考えなければならない。

それはおそらく消息を届け日蓮の指導を伝達する役割を担った弟子が、あらかじめ読み聞かせが容易になるように振ったのであろう。宛先の門下に対して仮名ルビを付けることで、理解が進むという目的も兼ねている。もう一つのケースは、日蓮滅後の弟子が何らかの目的で仮名ルビを付すという場合であるが、これはほとんど考えられない。真蹟に直に筆を入れるという行為の背景には、当然発給者たる日蓮の了承が存在していたはずである。書簡の性格上差出者と

受取者との間に第三者が勝手な介入を為すことはないとするれば、やはり受取者への伝達の役目を確実に果たすために第三者たる他筆者が日蓮の了解を得て書き入れたと見るのが妥当である。そのことを窺わせる表記の跡がある。

「上野殿母尼御前御返事」 御書 1583 頁 昭定 1896 頁 真 9 - 135



雪も又ふれり・ちりし	むしや
花も又さきて候き・無常	た かへり・
はかり・またも・きこへ候はさ	ケ
りるか・あらうらめし	く
よしよ	く
余所にて・よきくわん	く
さかな	く

傍線箇所は他筆者による覚え書き

この写真には他筆者による文章の区切り記号「・」が付けられ、難読箇所には「むしや」「よしよ」とルビを振り、脱字箇所に「ケ」を挿入している。これらは受取者たる南条時光の母へ、消息の内容を正しく読んで聞かせるために付けたものであろう。したがって他筆ルビあるいは校正は、受取者に届く前に施されていたものと考えるのが妥当である。

さて、いよいよ個別の消息に振られるルビの検討をしていく。比較的仮名ルビの多い以下の 6 書を取り上げそれぞれ字形の特徴などについて、日興仮名との比較にも言及しながらコメントを加えていく。

- ① 「下山御消息」(御書 343 頁 昭定 1312 頁・真 4 - 236)
- ② 「兄弟抄」(御書 1079 頁 昭定 918 頁・真 4 - 194)
- ③ 「兵衛志殿御返事」(御書未収録 昭定 1505 頁 真 4 - 283)

④「三三蔵祈雨事」(御書 1468 頁 昭定 1065 頁・真 9 - 5)

⑤「南条殿御返事」(御書 1531 頁 昭定 1170 頁・真 9 - 33)

⑥「上野殿御返事」(御書 1560 頁 昭定 1707 頁・真 9 - 67)

なおこの分析には日興仮名の特徴を把握することが前提となる。その特徴については本稿の注 10 を参照していただきたい。

⑦「下山御消息」 真 4 - 236

管見できる「下山御消息」の断簡は 35 片であるが仮名ルビについては 3 種類に大別することができる。ルビが振られている 24 片と抹消されている 9 片とはじめからルビがない 2 片とである。特にルビのない 2 片(真 244 - 2、247 - 2)の存在があるため、かなルビが分断される以前にすでに振られていたものと断定することはできない。しかし剥ぎの技術が相当に高度で写真ではその痕跡が全く見えないのかもしれない。実際ははじめからかなルビが振られていたとする説もある⁸⁾。

本抄は宛先が弟子日永の父・下山兵庫とされるが日永は因幡房と称し日興の弟子であった⁹⁾。しかし本抄のかなルビは日興の筆ではない。本抄真筆に書かれている「ふ・み」は日興の例外的使用仮名であり、「き・ゐ」は日興の常用仮名ではない¹⁰⁾。また「な・む・め」の字形、「かくゑきやう」の「や」の字形が相違すること、「を」の字形が明らかに日興とは異なっていることなどから日興以外の他筆者のものであることは確実である。

文字はかなルビなので小さく見づらいが次に掲示しておく。

「た」  238 - 2 が基本

「かくゑきやう」  250  250



「くゑん」 238 日興は「くゑこん」



「ほさち」 238 「ほさち」と読むのは日興と同じ

かなルビは全体的にいてねいに振られているので、おそらく日永が父のために振った可能性が高い。

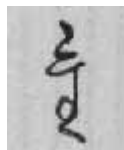
⑤「兄弟抄」真4 - 194

本抄の仮名ルビは第4紙から第13紙と第17紙から第32紙までの26紙と断簡5片が現存し、それらすべてに振られている。ただし1片(真4 - 221 - 3)だけルビの抹消跡が残る。ただ第2紙末文の漢文を読み下したものが第3紙の冒頭に記されていることから、本抄のルビは卷子本に改装された後に何者かが振ったことがわかる。

ルビの特徴としては「老」の多用にある。また蒙古を「むこ」としたり「菩薩」を「ほさつ」とするなど日興かなルビとの相違がある。さらに「な」「そ」「む」「ゆ」の字形、「かくゑきやう」の「ゑ」の字形なども違っているから日興ルビではない。

⑥「兵衛志殿御返事」真4 - 283

これは7紙現存するが、なぜか最後の3紙にはルビが振られていない。「兄弟抄」と「兵衛志殿御返事」のルビは別人のものである。かなの字形でいえば「兄弟抄」とは「あ」「ち」「な」「ま」「む」「ゆ」「を」が相違している。また「た」の字形は次のように明らかに違う。



「兄弟抄」

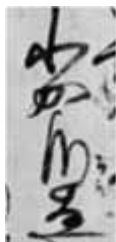


「兵衛志殿御返事」

「兄弟抄」では「た」は「た」「ゝ」を多用しており、この点も「兵衛志殿御返事」と著しく相違している。

④「三三蔵祈雨事」 真9-5

本抄のかなルビには他にはない校正の跡がみられ、真蹟をめぐる師弟間のやりとりが窺え興味深い。



① 真9-6



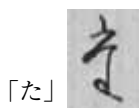
② 真9-12



③ 真9-17

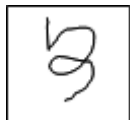
①は「わかり慧」の「り」に対して「ち歟」としている。つまり「智慧」と校正しているのだが、「歟」と疑問の係助詞を付しているのは、師に対する遠慮の気持ちが伝わってくるようである。②は和気清麻呂の五男で天台・真言の平安二宗成立の立役者であった「真綱」に「さねつな」と他筆者がルビを振っているのだが、これを消して左側に「まつな」とルビが振られている。これは真筆であり「さねつな」に引いた削除線の墨の色と同じなので、日蓮が他筆者のルビを再校正していることになる。伝達役の弟子が校正したものを、師・日蓮が再度確認しみずから訂正し直したというめずらしいケースである。③も「帰依」に対する他筆者のルビ「きえ」の「き」を日蓮が「くゐ」と疊書きして書き改めている。つまり他筆者がルビを振ったあと、日蓮に見直してもらっているという師弟のやりとりがかいま見えて実に興味深い。

字形からは「な」「ほ」「む」「め」が日興と相違し、字体からは「み」「は」「つ」「ふ」「ふ」が日興とはちがう。特に「め」の字形は本抄のルビの特異性を示している。さらに「た」の字形からも「兄弟抄」や「兵衛志殿御返事」の他筆者とも別人である。



「た」

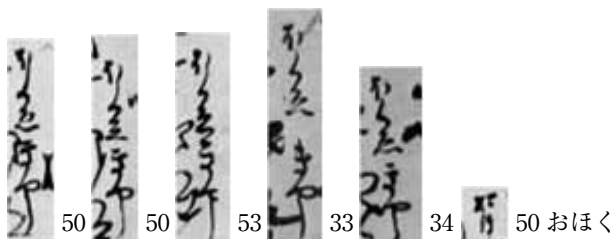
「め」



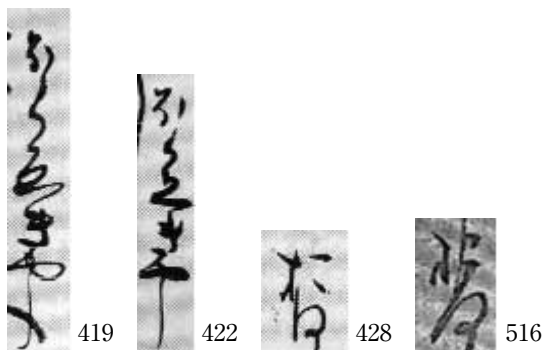
(16)

㊦「南条殿御返事」 真 9 - 33

「た」の字形は  が標準で日興の「た」に類似しているが、「ほさつ」と振ることや「ほくゑきやう」の「ゑ」の「したごころ」が横一線になる日興の字形との違いが窺われる。「おほ」の「ほ」は明らかに違う。



(参考) 日興の「法華経」と「おほ」



南条書でかなルビが振られているのは本抄以外に 5 書ある。これらに日興によるかなルビがあるかどうか、また同筆のかなルビがあるかどうかということも興味ある問題である。

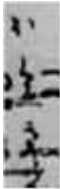
そこで日蓮が書いた南条家宛ての手紙にルビを振り、読み聞かせをする弟子を決めていた可能性を探ってみよう。

㊦「上野殿御返事」 真 9 - 67

まず「た」の字形をみると「南条殿御返事」とは別筆である。「た」



菩薩に「ほさつ」と振っており、「ほさち」と振る日興ルビとも相違している。「法華経」のかなルビも「南条殿御返事」とも「日興ルビ」とも別筆である。



真 9 - 69

また「き」を多用しており、これは「兄弟抄」にも見られた特徴であるが、「た」の字形をはじめ「兄弟抄」と相違する字形は多い。

他の南条書ルビには①「上野殿御返事」(御書 1537 頁 昭定 1305 頁・真 4 - 227)・②「上野殿母尼御前御返事」(御書 1583 頁 昭定 1896 頁・真 9 - 135)・③「上野尼御前御返事」(御書 1575 頁 昭定 1857 頁・真 9 - 90)・④「上野殿母尼御前御返事」(御書 1568 頁 昭定 1810 頁・真 5 - 26) がある。いずれもルビの量が少なく判断材料不足は否めないが次のようにとらえられよう。

①「上野殿御返事」 1 紙と 5 片の断簡が残っている。1 行断簡を除いてすべてにかなルビが振られている。しかし読み方のむずかしい熟語や地の文の漢字が読みにくいものに限っているので必要最低限のルビ振りになっている。字形としては「そ (は)」や「ろ (そ)」はやや日興ルビと異にしている感がある。

②「上野殿母尼御前御返事」 6 紙完存でかなの使用率が高いためルビは少ない。本抄は前述したように、読点を打ったり、易読の漢字に振るなど伝達役として



は慣れていない様子が窺える。「た」の字形も他に見られない。

③「上野尼御前御返事」 8 紙完存でかなの使用率が高く、そのためルビの量は少ない。読点が打たれていることも合わせて考えれば、字形からの判定はむずかしいものの、②と同人であると考えられる。授与者が南条時光の母であることも共通しており、南条殿母の担当が決まっていたと言えそうである。

④「上野殿母尼御前御返事」 日興のかなルビである可能性が高い。②③と同じ南条母宛であるが、本抄のかなルビは別筆である。わずか一例であるが「無常」

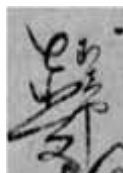
(18)

に対するルビが全く違っている。



②のルビ

9 - 135



④のルビ

5 - 27

④は28紙という大量の書状で、弘安3年10月24日付けになっており、9月5日に最愛の息子七郎五郎を失った母のなげき、落胆に同苦する日蓮の思いが切々と綴られている書状である。絶望の淵に立つ母に日蓮の心中を語り伝えるには日興こそが最もふさわしい状況が考えられる。

ルビは真蹟の難読な漢字にだけ振られており最小限度にとどめている。そのわずかに振られるルビの字形を見る限り、日興筆であることを否定できる字形は見いだせない。

④のルビ

さかん



26

あさ



26

こ

27

しんやう



27

しやうちう



27

とく



28

さは



28

ちうけ



28

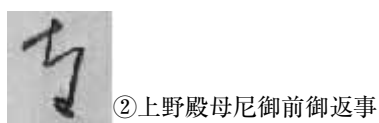
以上南条宛ての5書のかなルビの筆者は、2書(②と③)が同人筆であり、1書(④)は日興筆の可能性が高い。

なお、今まで議論の俎上に挙げたのはひらがなによるかなルビであった。実はこれ以外に「宝軽法重事」(真9-54)のように大量のカタカナルビが振られている遺文もある。カタカナのルビ研究は後日に期したい。

以上、個別に論じてきたが、相互の関係がつかみにくいきらいがあるので真筆・日興筆・他筆の判別の鍵を握る字形を横断的に整理しておく。

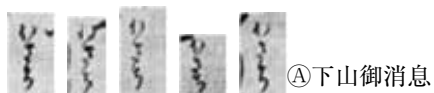
まず「た」を並べてみる。真蹟以外はかなルビであり、筆者の手書きによっ

て作成したものである（記号は本稿使用の記号を指す）。この中では「下山御消息」と「三三蔵祈雨事」の字形が酷似していることがわかる。



次に「菩薩」にふられた「かさち」、「かさり」の字形比較をしてみる。

「かさち」



「かさり」





⑤南条殿御返事



①上野殿御返事

小さく見づらいが、「かさち」の「下山御消息」と「三三蔵祈雨事」はここでも「かさち」に共通点があり字形も類似している。一方「かさり」の3書は皆違う筆のようだ。

以上結論として、

- 1、日興のかなルビは、ほとんどなくあえて日興ルビの可能性のあるものを挙げれば「上野殿母尼御前御返事」(御書 1568 頁 昭定 1810 頁) くらいである。
- 2、「下山御消息」と「三三蔵祈雨事」は同人筆である可能性を残している。
- 3、概して書状に振られるかなルビは、与えられる門下への運搬と読み聞かせの任を担った弟子によるもので、日蓮の了解を前提にして振られたものである。
- 4、したがって真筆と他筆ルビとの書かれた時間的な開きについては、ほとんど同時であると考えるのが妥当である。
- 5、真蹟に多く見られる他筆による校正の跡は、その大半は伝達役の弟子が、校正を要する箇所を発見することにより、なされたものであると考えることができる。

注

- 1) 明治 33 年の「小学校令施行規則」により「変体仮名」は教育現場で抹殺され、ひらがなは一音一字に確定したことにより、皆同じひらがなを書くようになった。そのため変体仮名解読の習得が古文書学習の大きな壁となっており、日蓮研究にあっても、ほとんどの研究者が真蹟の使用文字からよりも活字化された文献から研究するようになったのは残念である。
- 2) 春日政治は『岩波講座 日本文学』第 20 回配本の「仮名発達史序説」の中で「この期（奈良時代）の真仮名は勿論まだ普遍的の統一はなく、人によって其の用字も異なり、繁簡種々のものがあるけれども、概して奈良朝に比して遙かに簡易になった・・・」(70 頁) と述べている。確かに日蓮・日興・法然・親鸞の使用仮名を見ても相違する仮名より共通する仮名のほうが多い。しかし、現代の普遍化した統一仮名から見れば、この 4 人の使用仮名はそれぞれ個性のある違いを浮き彫りにしている。
- 3) 本稿ではひらがなの元になっている漢字を指して「字母」という表現は使用せず、「字

源 | で通している。

- 4) 小松茂美『古筆学大成』29 (講談社 1993 年) 16 頁
- 5) 拙稿「日蓮文書の研究 (2)」(『東洋哲学研究所紀要』20 号・2004 年) 378 - 379 頁参照。たとえば「え」は語の冒頭や「サ行変格動詞『す』の連用形」で使用され、「え」は「ま行下二段活用の動詞の未然形」で用いられる。
- 6) 山上、泉は、『「は」の仮名の稀なる事』『「な」の仮名の少き事』『「そ」の仮名の珍しき事』『「え」の仮名は稀有なる事』とし、「は」「な」「そ」「え」を挙げている(『日蓮聖人遺文の文章・語法研究』三秀社 1934 年 78 - 79 頁)。しかし本節で示したように「は」は例外的使用仮名であり、それ以外は用いられない仮名である。
- 7) 南条時光への賜書、現存 16 編の消息で使用する漢字使用率は 19.5% (合計 11226 字のうち漢字は 2192 字) でしかない。
- 8) 宮崎英修『日蓮とその弟子』(平楽寺書店 1997 年) には「元来は全部かながふられていたもので、分散した断簡の所持者の中にはあるいは振仮名を削り去ったものもあった。振仮名の有無はこれから生じたもので、仮名のないものは原本を見れば削磨除去した跡が歴然としている。」(157 頁) と記されている。
- 9) 日興の「白蓮弟子分与申御筆御本尊目錄事」に「一 甲斐国下山の因幡房は日興が弟子也。申し与ふる所件の如し。但し今は背き了ぬ。」(原文は漢文) とある。『日蓮宗宗学全書』第 2 巻 113 頁。
- 10) 日興の使用の仮名ルビは以下のように整理した。これは『日興上人全集』(興風談所 1996 年) 所収の写真からひらがなをすべて拾い出し分析したものである。
かなルビは、地の文で使用するひらがなより少なく、地の文で使用されない字形は一つもない。つまりかなルビは基本的に常用仮名の範囲内で使われる文字だといえる。

6) 山上・泉は、『「は」の仮名の稀なる事』『「な」の仮名の尠き事』『「そ」の仮名の珍しき事』『「え」の仮名は稀有なる事』とし、「は」「な」「そ」「え」を挙げている(『日蓮聖人遺文の文章・語法研究』三秀社 1934年 78—79頁)。しかし本節で示したように「は」は例外的使用仮名であり、それ以外は用いられない仮名である。

7) 南条時光への賜書、現存 16 編の消息で使用する漢字使用率は 19.5% (合計 11226 字のうち漢字は 2192 字) でしかない。

8) 宮崎英修『日蓮とその弟子』（平楽寺書店 1997年）には「元来は全部かながふられていたもので、分散した断簡の所持者の中にはあるいは振仮名を削り去ったものもあった。振仮名の有無はこれから生じたもので、仮名のないものは原本を見れば削磨除去した跡が歴然としている。」（157頁）と記されている。

9) 日興の「白蓮弟子分与申御筆御本尊目錄事」に「一 甲斐国下山の因幡房は日興が弟子也。申し与ふる所件の如し。但し今は背き了んぬ。」(原文は漢文)とある。『日蓮宗宗学全書』第2巻113頁。

10) 日興の使用の仮名ルビは以下のように整理した。これは『日興上人全集』(興風談所 1996 年)所収の写真からひらがなをすべて拾い出し分析したものである。

かなルビは、地の文で使用するひらがなより少なく、地の文で使用されない字形は一つもない。つまりかなルビは基本的に常用仮名の範囲内で使われる文字だといえる。

常用の仮名ルビ

あいうえお かきくくけこ さしすせそ やゆよ
なにぬねの はひふへほ まみむめも やゆよ
らりるれろ わをををん

非常用仮名ルビ

の (か) 〇 (か) 半 (け) を (た) し (な) る (な) る (に) 万 (ま)

- 11) 31 編に及ぶ大石寺蔵の日興写本の文字については、拙稿「大石寺蔵日興写本の研究」(『東洋哲学研究所紀要』第 24 号・2008 年)で報告したように、確実な日興の文字と比べ、使用かなの字体といい字形といい、多くの点で相違があり、ここでは「伝日興写本」として表記しておく。

(こばやしまさひろ・主任研究員)

A Study of Nichiren's Writings (4)

Masahiro Kobayashi

In this paper I have investigated the letters in Nichiren's handwritten texts, especially focusing on his use of *hiragana*. Through this investigation, I have set up criteria to distinguish the true writings of Nichiren and the false, by adopting two types of analysis: the analysis of Nichiren's handwriting and that of *kanji* which he based on in using *hiragana*. At the end of this paper, I have also investigated the point that we can see letters written by persons other than Nichiren in the texts ascribed to his. I have also discussed its reason, as well as who wrote them.